

組織目標評価報告書（平成21年度）

部局名： 埋蔵文化財調査研究センター

	組織目標	達成状況(成果)
教育	①「博物館実習」の一部を分担し、調査研究とその成果を教育活動に資する。	平成21年度は、博物館実習を津島キャンパスで行っていた発掘調査の現場と展示会の会場となっていた岡山市デジタルミュージアムで行った。昨年度は3班で各2日間の日程であったが、本年度は、実習の習熟度をより一層高めるために、4班で各2日間とし、個別指導面を強化し、その成果を高めることができた。また、発掘調査への参加や展示中の博物館を利用した実習は、現場での臨場感を体験し、学芸員としての仕事をより身近に考える場となり、例年以上に内容の濃いものとなった。 全体として、十分に目標を達成することができた。
		達成度： ④ 3 2 1
研究	①センター教員の個別研究を進め、外部資金の獲得に努める。 ②環境理工学部をはじめとする関連科学分野との連携を強化し、埋蔵文化財の調査研究が幅広い研究分野に資するよう努める。 ③研究成果を紀要あるいは展示会などで発表する。	①センター教員は5名全員が科研費への応募を行い、そのうち2名が採択され、3名が研究分担者として外部資金を獲得し、成果を上げている。 ②展示会を通じて、環境理工学部を中心に多くの関連科学分野との連携をほかり、今後の研究の深化の足がかりを構築した。 ③研究成果は展示会の展示内容に反映する形で発表した。 以上、いずれの項目においても目標を達成することができた。
		達成度： 4 ③ 2 1
センター業務	①構内遺跡の発掘調査を実施する。調査にあたっては、記録のデジタル化を図るなど、新たな調査方法を積極的に導入し、調査の効率化と質の向上に努める。 ②総合教育研究棟(鹿田地区)の発掘調査に係わる報告書を刊行する。 ③大学生協東エリア店舗の発掘調査に係わる報告書を紀要に掲載する。 ④『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2008』を刊行する。 ⑤『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報』42号・43号を刊行する。 ⑥鹿田地区および津島地区における発掘調査資料の整理作業を推進する。 ⑦木器保存処理を推進する。	①発掘調査では、津島・鹿田両地区で3カ所、計3497㎡の面積を調査した。期間は6～2月を占め、年度後半は調査員の大半が調査に携わることとなった。その中で、測量機器の改善をはかり記録作業の迅速化を促し、遺跡を理解するための時間を確保した。 ②総合教育研究棟の報告書は年度末に入稿することができた。年度内の刊行にはわずかに達しなかったが、内容の濃い報告が行えた点は、多少の遅れを補う成果となった。 ③④⑤大学生協東エリア店舗の報告書、センター紀要、そしてセンター報は、全て予定通りに刊行することができた。 ⑥調査資料の整理は、津島地区の作業終了後、鹿田遺跡の遺物洗浄を行った。洗浄という比較的単純作業の実施により、発掘調査による調査員不在の影響を軽減し、順調な作業を推進した。 ⑦木器保存処理は、含浸槽の故障というアクシデントがあったが、修理後、順調に保存処理作業を再開した。 以上、いずれの項目においても、十分に目標を達成することができた。
		達成度： ④ 3 2 1
社会貢献	①岡山大学60周年記念事業の一環として、岡山市デジタルミュージアムにおいて特別展を開催し、学内外に調査成果を積極的に公開する。 ②発掘調査にあたっては、現地説明会を開催し、その成果を広く一般に公開する。 ③職場体験などの中学生等を受け入れ、社会との連携、協力を寄与する。	① 8月5日～23日、岡山市デジタルミュージアムにおいて、岡大60周年記念事業の一環として特別展を開催した。歴史学と環境学を軸に多分野の研究成果を、「水と環境」というテーマにまとめた展示は、その内容に加え、学長をはじめとする講師による講演会・各分野の教員による出前講義など、岡大ならではの展示構成は学内外において広く好評を博し、約2500名の入場者を得た。 ②2件の発掘調査において現地説明会を実施した。津島地区で約130名、鹿田地区で約160名の見学者があり、調査成果を広く公開することができた。 ③職場体験は、例年2校を受け入れているが、本年度は3校の中学校から、5月・11月・2月に各3日間、中学生計9名を受け入れ、学校活動への協力を積極的にすすめた。 以上、いずれの項目においても例年以上の成果を上げており、十分に目標を達成することができた。
		達成度： ④ 3 2 1
【自己評価総括記述欄】※目標及び指標の達成状況について総括し、次年度に向けた改善点等を記載してください。 本年度は、発掘調査に関して、例年を上回る件数あるいは面積となり、年間の大半の期間と人的労力を割かざるを得ない状況となったが、発掘調査を含め、そのほかのセンター業務に関して、十分に目標を達成することができた。社会貢献では、学内の様々な分野の研究成果をとりまとめた特別展の開催は、多くのメディアがとりあげ、また多数の入場者を得るなど、学外への岡大力の発信として特筆される。また、現地説明会でも十分にその目標を達成した。こうしたセンター業務や社会貢献に加えて、研究・教育面もあわせ、全体的に例年を上回る成果をあげることができたと評価できる。来年度に向けては、本年度の成果を受けて、さらなる研究面での推進が求められる。		

【達成度】 4:非常に優れている 3:良好である 2:概ね良好であるが改善の余地あり 1:不十分であり改善を要する

注)本様式は一般的な学部・研究科用であり、部局の特性に合わせ設定した領域・指標により修正してください。

[組織目標一覧へ](#)